

# 外科醫書法

六

和書門類			
四三三	一三六	一	九
號	函	架	冊

內閣文庫			
四三三	一三六	一	九
號	函	架	冊

內閣文庫		
番號	和	43131
冊數	9 ( 6 )	
函號	195	307



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak









第二を潰瘡乃形小正邪此差別あり事。

第三を潰瘡此盛衰小應し。顯る。反應症之差別あり事。

第四を病源小從いて潰瘡小頑敏の差別あり事。

第五を病所の要害小據て潰瘡小善惡の差別あり事。

其第一を瘡の出来る。幾日をも曆はる。年を越る。その。舊瘡と云ふ。

其第二乃形正を論する。先圓瘡即正邪瘡

正形を論する。深瘡灣瘡癭瘡突瘡

別つ。更なる緊要なる。瘡底瘡縁瘡邊

且瘡内より膿出を汁を檢する。其上瘡

内小肉牙は生せし者。微ら生する者。夥

小生する者との別。瘡邊を焮衝硬結

水腫を生じ。此差あり。是を意して診す。

其第三を瘡乃生機に應し。其所小顯る。反應

症あり。其一を痛瘡といふ。其二を實瘡といふ。其三を弱瘡と云ふ。件を別して精しく論

外科醫法 卷六 海舟先生集



痛瘡

瘡所の神経、血脉に刺衝機、尤ふれり者あり。一名  
刺衝機、尤進瘡といへり。一種の潰瘡なり。又創ハ  
云ふ及ぶ、尋常の燃衝を、内外より犯さるる  
乃絶えず、然る時小々、此痛瘡に陥る者あり。痛瘡の  
正徴を、痛ありとせし、觸せば忍び難く、形正  
るる、底を不平ありて、摺實乃色の透通るる  
如く、所らあり。又顆粒の軟小あり、物ニ  
被り、所を、洗い拭へば、毎粘着ありて多

を離れ、滲出す汁を淡く、其性烈し、  
外皮を爛れ、周邊羅斯の如く、赤之色つたりあり。  
且時ありて、全身小熱を發す。此熱を多し痛小應  
りて往來也。

瘡乃周邊を速小蝕し、蔓延し、瘡々、大抵痛  
瘡此性より具る者なり、其甚しき、幾日成を經  
たり、外皮を廣く潰る者なり、蠶蝕瘡と名之。  
此瘡ハ、神經血脉小富なり、所、突出せり、陽莖鼻  
耳等小專ら生ず、又徽毒痛風癌毒の、全身  
乃急液質となり、者々、殊に痛瘡を患ひ易し









押せぬ、其色一旦を消ゆれども、復ひ出来たり。痛甚た強うらぬ、多ハ腸胃症を無ぬ、幸ある人々此羅斯性の焮衝、三日より九日ありて解るあり、其散り跡の外皮を、魚鱗の如く剥きて、剥落し、瘡の舊の姿にて遺る者なり、幸ある人若く之を治方より治る時、瘡邊乃焮衝したる所、速く壞れ、瘡となり、焮衝を次第に深所まで及いて、蜂窩織を蝕み、小至る。其深所を傷み、焮衝を痛堪うた、瘡邊の赤色深所まで及び、指して押せぬを消え、發熱劇

ら、腸胃症を無けり、稀なり、其ハ劇し者ハ、動をすれ、壞れ、陰にやけ、又皮下膿をこの裏に膿積り、其膿を体内へ吸入、膿毒症を誘引するに至る者少なり、此ハ劇し者ハ、瘡邊乃多量に出来、焮衝を退之者なり、大抵此焮衝の出来し時、瘡面徹して廣うなり、圍りに凝結した汁の滲出する者あり、焮衝數々反復し、そのために凝結した汁が滲出する時、乃ち其瘡變り、肝膿瘡となる者あり、既に瘡の肝膿性



二變了了時あそ、知覺衰へて歎了了了。臍臍  
 物融るはれ、消失収以、小ららはれ、愈ゆる  
 大くをなす、大くをなす、大くをなす、大くをなす  
 深く了焮衝と誘出者、寒氣を犯はれ、口禁了  
 破了、身心を勞し、瘡所を穢し、刺戟膏腫定帶を用  
 ろる小由りなり、慎らるへむ也。  
 弱瘡とて、勢衰へ果了、振あは、能少はる瘡多云  
 かなるわゆる事に二件あり、一々全身不關わも、  
 一々病所不係るる、余案、病所不係る者、およ

一潰瘡月不重補て歎了了了時あそ、瘡縁臍臍  
 の如く硬くれ了者即是なり、其は瘡縁正し  
 らは硬くは、又厚くなり、青色小變は、瘡底小肉  
 牙生す、大く少く了、膿乃出るを微くけ  
 せけ、乾了、痂多結し、恰も愈るる、是れは  
 顯了諸者なり、全身に關わると生ずる弱瘡、虚  
 弱乃人、曾又小之病小罹り、生機乃衰へる、  
 亦由不發す瘡多なり、又賤業する幼年時、  
 専ら是を勞し、休息を暇する者ハ、下支頑委、  
 了のゆゑ、了、小護する瘡、動をすれ、此弱

外科醫法

癰疽疔毒



瘡小變りたり。惡液質のうぢあはれ。腺病質乃人、瘡成や之等。殊に此弱瘡小變りかた。病院の氣不付系。又を食料によら。尋常症は弱瘡小變り事あり。又壞血病人乃瘡多發すれを。其瘡を甚るる。虚瘡小陷是。血出ずる。海綿状は恣肉突出。惡膿滯烈。成流し。過半を壞死す。但し瘡多發りたる人。壞血病を發し。亦事物小感るるを。全身よりその比る露り。を顯せ。却て其瘡の壞血性小變りあり。其第四の病源は從て瘡を別り。正發瘡特發

瘡といふ。正發瘡より又創膿瘡は直ら。轉して潰瘡小化る者。汚穢心勞若くは治療の誤り。治癒の機成りたる時。乃ち是小轉する。特發瘡と一毒乃全身に洩る。其質惡液小なり。人より發する瘡より。いそ。徵毒小洩る人。徵瘡多發し。痛風を患ふ人。痛風を發する。特其其人少のみ發する瘡。猶經血閉痔血閉小原はを發する。係血瘡といはる者。爰小屬し。凡此種の瘡を。全身小顯る。病症小徵り。事あり。



考し、各是を制して治方は別し、別し患液質編七卷  
 引論十月、小治し精しと論すし。  
 其第五、病所の要害小治し、是を別か、は表  
 皮粘膜皮裏蜂窩織腺骨質乃潰瘡とすし、表  
 皮の潰瘡を、殊小経久の皮病、皮の焮衝汚穢外傷  
 等小治し、發し、廣之蔓延し、皮裏小治し、候蝕  
 也、臭も稀汁も夥しと流す、故小膿瘡とす云。  
 皮裏蜂窩織乃潰瘡を、外皮即表乃瘡の治療を急  
 了時、是を小變り、又傷風性焮衝乃皮裏之  
 宿し、其蜂窩織小膿を釀せ、乃ち此れと轉す

了れり。

腺織乃潰瘡を、腺病徽毒傷風等乃焮衝の轉化之  
 了、大抵緩慢不經過し、遂に弱瘡小陥り者なり、  
 筋織の潰瘡は、以稀なり、大抵惡液質癌毒病院  
 壞死筋創等、轉化す者なり、  
 骨質の潰瘡は、殊小多き病なり、大抵惡液質腺病、  
 徽毒乃續發症とす、潰瘡中のいと頑る  
 者なり、  
 纖維織の潰瘡を、獨り纖維のみを、織成す  
 所の創傷と、痛風病人の、是を患ふるなり、纖維



織を潰爛するはく鮮けしむる也。

潰瘡治方總論

潰瘡の治方も其所を愈すは主とする云々  
及はれせと毎愈ゆるは瘡と愈す時を却て體中  
之害は倍すつは様ある瘡も其悩症を去るも  
亦治術の一方あるはつはき總て潰瘡も汚穢  
を去り浣洗浴漬して其臭腥を去り慎みて綿  
帶を行し大氣乃瘡面を犯すを避り主として大  
氣を犯さずはれ潰瘡を惡くをせしむる也其上  
病所を安放して高之置つはれ血乃病所より

流利水やひて其所の血積を避るるの一術也。

抑潰瘡治療は生機の影響となり顯れり

瘡の性所謂痛瘡實瘡辨し其元ありその

是を殺し其衰つる者は是を補あり各其

度小適かりむはれ此一方の之あり善む

肉牙乃出来る瘡の愈ゆる者少かりはれ

瘡所は温水小漬して其汚穢を去り専務と

そは手輕き方なり要あり一術なりそ

はれせ積年の頑瘡も忽ち快復の機動出る

愈ゆるはれ著るはれはれ世の人の急



已くやけし者多きや、ソウリそや、さしハ頑癩  
 治所より少く、病者に浴室小近し所小移し居ら  
 る多敷く浴し、瘡所を洗清むるゆ、治方の一術  
 といふべし、さしハ便利ニ應ずるべし能はし  
 病者少く、温水に大盆小盛に、海綿をそて、あせ  
 之灌きつけ、瘡所の汚穢を去るべし、只弱瘡の知  
 覺鈍き者には、海綿に温水を含ませ、直ら瘡  
 面小當つし、瘡の深き下穴の如く、おそ、其中に  
 膿の積る者少く、軟物を撒糸液丸り、挿入し、  
 膿を拭去るべし、瘡面に知覺敏き者、お酢液に

但し良膿に醗ゆる瘡面を、其膿の肉牙成衛る  
 べし、ゆゑ小、あせを拭去らるべし、淡くして悪  
 臭ある膿をば、慎みて拭去るべし、異物ありは、鑷  
 子で拵去る。瘡縁に粘着なる者ありは、三ルレン  
 葉を貼るべし、是を放すべし。

吾國此俗、頑癩を病せ、遠く温泉を尋ね、往  
 ず是に浴し、其効驗乃著る事小誇りぬ、余其  
 効を竊に察するに、膏小鑽氣のふありに、  
 らん、瘡所を温氣に蓄め、廢機を奮起し、且汚  
 垢を清潔にする故あり、余瘡を療する





一、癩癧小年有者、近頃雲煙兒利弗、及此書小據  
 了頑瘡を治する小、温水の効ありきと奇なりと  
 知る者、就中宿疾既小治りたるあけり、頑瘡の  
 數年愈り者、足小治りたる如し、足の瘡珠ニ  
 大桶小熱水を盛り、病足を其内小漬けしむ  
 十分時許に、毎日二三度、又復し行  
 其餘只瘡所小乾撒糸を貼しむ、  
 治せしむ、不思議云々、  
 潰瘡を治す、洗滌し、後を拭乾し、直ち  
 之蓋貼し、水、必寸水之瘡面を露し、大氣

二、觸しむる、大氣小感、其甚害らば  
 蓋貼物を、蒸劑、膏藥、油藥、水藥等、其宜  
 した、撰りて、布片又を撒糸小濕し、瘡面小貼し  
 墊巾を置、條布少を輕之卷、加密列、浸汁  
 麻酔藥、温水、蒸慰、瘡面小直り、行  
 知覺の敏き瘡、布片を  
 濕し、瘡面小籍、其上小藥を貼、其藥のみ  
 換、大氣小傷ら、此憂を、糊  
 劑を用、亦油を濕せ、布片を籍、  
 乃上、行、膏藥を一晝夜小一を、換





う法とす。  
 油小濕せし布片貼す。總は潰瘡小通し  
 良効あり者とし。新絞の品を用小供し。絞  
 て日と経ぬれを。其性變じし烈しを棄却し害  
 らま。其品を亞麻仁家とす。其次を扁桃油阿列襪  
 油系あり。總て菓實の油を脂よりす。布片小  
 濕したる油の速う乾くを防止す。其上小蠟布又を油紙を覆ひ。塾中を置玉條布小  
 一とす。但し布片を以疊て數層とす。此法小供し

者小藥料を濕す。撒系布片の料とす。瘡面の知覺敏は者小供し。撒系をいおす。軟かき布片を了ん。嫩らるるへし。知覺尤ありたる所を敷き。痛瘡あり。刮屑撒系を用う。刮屑撒系をいおす。晒し穴を緻密乃綿布。我真固本綿紙。刃剃り。其屑の綿めやうにひきたる者を取。用小供ありと云。總て此潰瘡を治す。外敷藥を撰ひ。其宜しきに應じ。品を取。時と斟酌し。不行小供。要ら





事少そあれり。此一事乃之不可飲了。瘡數を  
 生れ。殊小瘡乃發して。潰之廣かりむとす。勢は  
 盛なり。時と。瘡の性不應小。動之機は。強弱の  
 度小後ひ。痛瘡實瘡弱瘡。意を運ら。以時醫士  
 たる者此。工拙小關する所。少を。總て瘡乃  
 清之。肉牙の生る時。緩和藥乃主  
 治する所なり。瘡底既小。肉牙を生る時。癩痕  
 多結む。とびり。時あり。輕き収歛藥。鉛糖水。消酸  
 銀水。此主治なり。所あり。肉牙乃歛る。むす  
 了。機は。促せ。海綿瘡。小初。収歛藥を

主として行ふ也。

外敷劑を行ふ。只寒水温水。此を瘡所へ  
 行ひ。専ら養生方を守る。此を治す者。亦少  
 り。あ。此を。醫藥乃助。速に愈  
 へ。瘡面癩痕。結ぶ。小至る。下を  
 急して。促す。あ。促す。度小過。小。輕  
 之。破。瘡痕正。却。全愈を  
 ね。者あり。

潰瘡治方各論

痛瘡治方。内器此刺衝機。尤も。痛瘡の源に



乃小者、是を探得し、務て制しつ。若堪か、  
 小痛の瘡、所小の原つて来たり者、小は、軟和劑  
 と行ふ。或は腐藥を行ふ。其尤も、勢ある  
 瘡面を打崩し、其機を變革せしむるも、亦治方乃  
 一術小をわたり。

腸胃症を、瘡を、敷く痛を起し、むる源を  
 了らざる、乃ち吐劑下劑乃効ある者なり。又輕泄  
 劑乃應ずる症あり。宜し之斟酌す。痔血、経血  
 乃鬱閉せり来り者、小い。その閉血を通せしむる  
 の方を處す。且鎮痙劑、麻醉劑を兼用して、神

經乃刺衝機を制し、是は、敷く効あり。と、乃ち蠶蝕  
 乃勢猛し、を瘡小。阿片欠つらぬ。此症の要害  
 此地を犯す。其所危し、此者、小阿片を大量小  
 用す。

痛瘡此、腸胃病小交累し、了来り者、頗る多し。腸  
 胃乃症狀正、顯せし者、小へ、母治療  
 之臨みて、注意し、了注し。余、微瘡の陽  
 莖小生じ、日夜痛堪わらぬ。百藥効を、次、菜小  
 候蝕し、其半を壞せし者、小吐酒、石才氏を  
 一日、効量地、了與、了、小痛漸と去り、嘔氣



之患發せしむ。瘡面清く肉牙生るるに  
 至りて、初之其量小や堪はれむ。嘔氣を生  
 じ、乃漸之量と減り、遂少く一二日  
 を用りて全効と修め、事少く吐酒石は効豈  
 獨に、滋養を制す。此は、  
 瘡所、麻藥を貼す。又極末に亞麻仁を製し  
 糊劑に麻藥を合し、者。又石灰水鉛糖水又扁  
 桃油を煉入膏藥小阿片水酒越幾斯加ハ  
 貼す。又潰瘡は、流出汁の性の酷  
 烈なるに、小刺衝機を、痛堪はるるに

妙なり。了々轉覆方即變乃効あり所あり其  
 方を、腐藥の赤降瀝、砒石を撒かけ、又を消酸銀を  
 捺す。又を并瀝皓礬乃濃水を貼し、瘡面を盡之  
 爛す。了々、了々、痛倍堪はるる出来  
 了、覺ゆれ、全之然る者少く、却  
 其痛速退す。腐藥のた、小結つる痂乃、落を  
 む。小既小其裏、肉牙は、簇生る者あり、  
 痛瘡の病源、惡液質を、常注意注し、  
 方藥之處す。了々、了々、了々、了々、  
 痛瘡は痛堪はるるに、先其





痛楚を寛らめ、瘡性を變革せしむる。蝨蝨瘡の  
 要所を犯さざれば、亦是小同し。其侵蝕せむ  
 とく、危急を先凌得ず。其後小源病不持効あり  
 方藥を施さず。特効あり藥とす。譬ハ、黴毒家小  
 ハ、瀕劑付用する如し。小瘡を治すに、  
 實瘡治方、潰瘡の焮衝を、合はざる者ハ、多ハ養生  
 乃度小適ハ、はらふと出るなり。乃病所を安放し  
 て汚穢を清め、口禁を嚴之。以時々瘡状著るも  
 善徴と顯り、膿を流すと影し、速に腐の  
 姿小復るなり。されど焮衝の瘡邊を越ると速に

者、或ハ要害の地を犯し、忽ちせよなり。つたふ  
 者ハ、嚴しと消焮方を行ひ、腸胃症小原は、よ来  
 つる者ハ、吐劑下劑を與へず。一時ハ其勢を折  
 るをよき、外藥ハ瘡の性不應し、行かへしとい  
 へど、毎通して蒸漏方を行はせよ。了々化膿を促  
 すの効著るる。其化膿ハ瘡に分離させし也。  
 弱瘡治方、全身に衰へたる者ハ、美食せしめ、  
 蒲萄酒、麦酒、幾那葛、私加、僕刺等を與ふ。瘡所  
 此ハ弱る者ハ、其所小刺戟方を行ふ。足は重  
 と云といへど、毎適當に藥を、香竈藥亞的兒性



藥を染就中加密列浸汁効あり。此汁を膿の増減  
 共小行あり。其驗少々あり。弱瘡の膿と多之流  
 す者小ハ消酸銀水并瀕水に阿片を加ふ者。症  
 亦ハ加ふ者。皓礬水鉛糖水等小阿片を加  
 少者。神効石龍腦酒亞麻仁油小煉た多幾那  
 膏等。皆効あり。又乾撒糸多貼して。條布より卷置  
 之効あり。弱瘡の膿を徹なく流す者小  
 ハ刺戟膏即ち赤降膏實際斯膏。拔實里膏秋爾撒  
 謨索里膏なる。又阿片酒を瘡内に滴して効あり。  
 又是を布片小濕して貼するを多し。亦ハ刺

戟膏ハ善き肉牙の瘡底に生るるを見たり。去へ  
 し水を用いる時ふや癒痕を妨る者なり。乃  
 ち乾撒糸又ハ消酸銀を代用する也。

舊瘡

月を重祓歳を經ゆる潰瘡を。其性の何たるを論  
 せし。分泌の器と看做す。わたり一種の分泌  
 出来ぬ時ふや。亦ハた免し。全身小關する患  
 也。亦少々あり。小便減して發汗の機衰へ。是小  
 代り潰瘡に汁を利するなり。此れは内器の  
 官能衰へ。其分泌の機調を失ふ。舊の如く







淋病

淋病

かゝる毒、又毒膿を体内小吸入し、膿毒症に誘引し、遂に救急の場に至る者あり、又潰瘡より膿を漏らす者あり、諸力竭して、勞瘵水腫に陥る者あり、潰瘡は四支小發し、甚しく廣うする時、其四支用小應ずるに能はざる故、小切斷術を要す、この事、多し懼るべし、事此出来ぬ者、此を潰瘡の發し、其勢乃顯はるる、是を防ぎ、生じしむるに、其既小發する者、速に小飲をせしむる策あり、但し潰瘡は生じ、其の要害乃地

拘りし、是を發し、以來他患の退む者あり、治すべし、此は要害乃地、潰瘡を發し、其所の官能妨げらるる時、遂に命を危うくす、見ゆるを、瘡より滲出す汁を、支へ、愈むる時、是を為し、全身を感傷するの恐、亦少なきと思はるる者あり、是の時、小、豫め妨げらるる所を撰りて、瘡を工し、作らば、後、初に潰瘡を治すべし、工みな、瘡ハ自ら生じ、潰瘡の漸く、分泌器に代り、体内の毒、排し、功に及ばるる者あり、此は、年経

小科醫法

十九 齊聚清書



たゞ潰瘡殊々そそ體質の病ぬる者小らあそそ  
慎み治方を施しそそそそ

圓瘡

形正圓なる瘡を楕圓なる瘡より治しつたふな  
る。楕圓瘡を肉牙の生るる小後ひ。外皮出来て縁  
れ相近より所々糸歛まれ。正圓瘡を縁の肉  
牙の歛るる小後ひ。邊は外皮縮む。恰も囊の口を  
括るる如くなる。全々歛りんとす時小を  
皮のひくく緊る者なり。又瘡縁の相近より時小  
ハ、肉牙自ら起上りて。外皮より高くなる。大瘡を

云小及び小瘡なり。母。楕圓より割除ふはれ。  
治しつたふ者らそ。

灣瘡一名凹瘡

瘡邊の皮展し。瘡面を庇ひ。瘡面を凹み。其生  
機衰へ。治しつたふ瘡より小膿瘡の深々膿を皮  
裏の蜂窩織肉小積たる者なり。殊小此瘡小轉しや  
る。しはは傷風性れ焮衝す。皮裏の蜂窩織り致  
せし者。或を膿瘡の焮衝微なる。たのけり。破  
るる能ふ。割開き。膿を漏せし者小原つた  
者なり。ふら瘡を庇ひ。皮を展きて薄くは



已。肉より放也。腺病微毒小原はよ来たたる瘡は高  
其上神經血脉乃失する者なり  
 低らざる平らなるを其色紫赤或は紫黒或は  
 浅藍なり其内小汁を蓄ふ淡く濃く水め如き者  
あり者生くそ庇つる皮の是を支ふを拍く絞  
るふららきれを漏せつたふなり。又探針を挿し  
て搜るる。諸方より向ふて通するを其は辨症の  
一方とをさへへし。ふと展して弛ゆるる瘡縁を異  
物とさるる瘡面を犯はつ故に。化膿を養ふる漸  
之生肉を候蝕し。且膿の漏れけはは瀦るる瘡  
面廣く自然に任せ置時をたゞも治すべし

瘡の日次延ぶる。乃ち醫術の助をえて生機乃  
 衰へし。瘡縁を震りし。又を是を盡之切除之  
 也。  
 瘡の低き所を。瘡の口小就て低く云ふ。譬  
方は地面に向い下常は膿の瀦る者なり  
方は低き所とつたを常は膿の瀦る者なり  
 對口を穿ちて其膿を瀦らるるや。置時  
 たり。本口と對口との間の皮を肉と愈合なり。又  
 瘡口より四方に向て割開き。細片とせし。若  
 こ皮を縮めて硬くせし。其下の肉と愈合なき。若  
 薄くせし。皮の生機甚しく沈みて紫色或は



紫黑色、うろこ、くさくさする者、こもくさる術の効をよ者  
なり、則ち鑷と剪とを用ひて生皮を剥する所と  
剪去ると尤も、或は腐蝕石、硝酸銀、安質  
酪をもて、猛之焼之時、その痂を結ぶ、其痂脱つ  
せ、跡を愈る者あり、ふくつ方あり、瘡縁を變  
草せしむれば、積年愈はる瘡の、不日愈ゆ  
る者あり、くさくさる者あり、

瘻瘡

瘻瘡、こも、皮肉の内、管と似たる瘡の出来、膿  
の積り、こも、所へ通する者、と云、獨り膿の積り、

所へ通するは、くさくさる腔内、分泌器及其漏管  
不通する瘻瘡とを、統て瘻瘡と云ふ、凡瘻管  
は首尾共に、両端小、口を開ぬる者は、全瘻と云、  
其一端は、口を開ぬる者は、不全瘻と云、は、その  
瘻瘡を、涙器、溺器、腸及骨乃腐る、所へ通して、其  
物を漏る者、を、瘻瘡、皆其所、よ、名、と、異、あり、  
こも、くさ、る、譬、を、涙、瘻、溺、瘻、糞、瘻、較、節、瘻、骨、瘻、等、の、如、し、  
膿瘡、不通して、積り、膿を漏る者、を、真の瘻瘡  
と云、辨症を、外見、と、膿、の、漏、る、事、多、く、其  
一所、を、指、し、く、押、せ、る、膿、の、多、く、流、出、る、者、あり、皮



肉乃間以通之瘻其外皮の色は變りて赤く瘻  
 比上を押しせし微し之痛を覺ゆるときして識へし  
 探針あり探せしむるにたゞしは赤きを辨する  
 よるあり其方の銀をて作し端に球ありて質の灣  
 るや以て探針を、拇指と示指の間を輕く執り力  
 次入れしめて、瘻口へ挿入し其端の支ゆる所を  
 尋る當り所ありて、暴よありしを挿むとす  
 うらひ乃ち探針の位置を變へて、數々挿試むへ  
 し指小力を用ゐるに、瘻路に向へて自ら入る  
 者あり、若し位置を變りて、いへば、入らば、時不

ハ、瘻路の應し探針を灣け、復し挿試むへし、但  
 し一度あり瘻路探得し得しを、いへば、  
 りぬ、數試みし始り其路を探得し、  
 是を探るゝ便りありしむらび、  
 刀より開き、又ち腸線牛羊の腸を細く剪りて吾國  
 者、蠟、海綿蠟を融かし海綿を濕し其海綿を  
 用、小、應、し、て、細、く、剪、り、て、瘻、孔、へ、挿、せ、し、身、熱、体、用、の  
 小、由、て、蠟、の、復、し、融、け、後、に、膨、ら、む、者、を、わ、り、  
 了、口、を、擴、げ、又、ち、緩、く、藥、料、を、數、々、射、注、し、る、時、小  
 小、路、の、開、け、を、探、せ、し、む、者、を、わ、り、  
 膿、瘡、潰、瘡、乃、膿、の、漏、出、る、時、或、ち、異、物、朽、骨





の瘻内不留るる時あり、瘻瘡不變るや、故に膿瘡の割開との遅き者と、刺とを口乃小は、者とは、瘻瘡之轉りや、又口を開きて、燃紙を挿し、又、腔定帯を行ふ、膿の流利に支ぬる者、腱膜筋裏に膿瘡、及、弛緩蜂窩織に發する膿瘡を、動を止め、膿の垂下し、故に、瘻瘡不轉りや、以て、或、其漏管不通なる瘻を、分泌汁の常ニ瘻孔より通ずる、故に、遂に瘻管不變るや、然るる時、實に治し、た、そのなり。

瘻瘡は總して治し、汁の常ニ瘻管中に積るは、此汁管中小鬱して、これを犯せば、おれ、うた、を、輕に、焮衝の、絶間を、出来、終に、其所へ、硬結を致し、瘻管の内面、肉牙を生じ、能く、却り、却り、粘膜小類を、生じ、粘膜の、故に、醫術を借ら、治る者、實に稀なる。

又、創の分泌器、其漏管に通ずる者、初に、糸を、こ、こ、意を注ぎ、縫合せ、又、漏管に管を挿置、こ、こ、瘻を、轉り、や、以て、者なり、膿瘡潰瘡、亦、常





此等ノ意ヲ用アテ、膿ヲ漏シ滞ラセシメ、其  
 膿ノ支ルル所アルヲ割開キ、蒸劑温浴ナク行  
 ヒ、病所ノ位置ハ度々適カ時アル、瘻瘡小轉ナ  
 ケ患ヲ防ム。

分泌器漏管ノ瘻ヲ發スルヲ、肉牙ヲ震起シ瘻痕  
 ヲ結リ、此ノ治方ヲ用メ、又々分泌器ヲ壞レ  
 ノ方アル治スル、又溺道ノ瘻管ノ、溺道ノ管  
 ヲ挿置テ、瘻ノ治スルヲ去ル、此ノ瘻管ニ  
 生ルル瘻ヲ、口内ニ其漏口ヲ作リ、唾汁ノ流  
 出ルル支リヲ見テ、瘻管ヲ塞ム。

瘻ノ瘻瘡ノ瘻

頰上ニ及創ヲ受リ、唾瘻ヲ生シ、積年治セ  
 ば、者ヲ瘻瘡トシ、余是ヲ診テ、口内ニ通ス  
 ラステ、ニアリニセ管漏泄管此口、既小塞  
 ン、見エ、此ヲ切リ、乃チ其口小當セ、所ヲ  
 刺開キ、唾汁ノ支リヲ漏出スルヲ認得、此ハ  
 頰上ニ瘻口ニ消酸銀ヲ搽、二三日ニ  
 一々瘻口ヲ飲水ニ入リ、  
 瘻ハ膿瘡小通スル者ヲ治スル、第一ニ病源  
 ヲ去ル、此主トシ、其次ニ膿ヲ漏ヤシ、



志む。其漏やけりしめむ少く刀少く外口  
を開き、又々腸線蠟海綿を挿し、擴く處、温水  
を射注し、温浴を行ひ、亞麻仁の糊割度、小適へる  
位置等、皆其術を察ふ。了る單易の治方とて、殊  
ニ病根とてありし惡液質を、治すべし。内服藥を  
兼用し、時々、癰瘡治す者なり。若此等の方、此  
驗をふ時、あそ、三術あり、宜しき症に應りて、撰用  
し、その、其、一を割開方、其二を熱絶方、其三を  
焼爛方なり。  
割開方を即効と奏する術なり。三術の内、

の、多々用たりし方、その、癰管の内  
へ先、導引針を挿し、す、治りて、小割刀を入、  
癰管を覆ひぬる皮肉を割開なり。若癰瘡廣げ、  
鋒先、球の、刀、  
て、瘡内、送り、皮肉を割るなり。若首尾、  
液、只一口なり者、導引針、  
割刀を挿し、其鋒尖を刺し貫し、鋒、  
を見、微、  
向て、  
痛を微、瘡口、



受は勝るを云ふ。

余積年瘻瘡を療むるに種々の方々を倣ふに盡  
く其術を試けり。偶に徹断法等の術、意は浮ひ  
たる。其術は是を試むるに其術は簡易な  
れ。近頃ハ此術を施しける。此書ハ亦  
此術の快手を行ひやせり。且痛の少く  
身を載らぬ。我行ハ所ハ術の此書ハ暗合せ  
を奇とし小ハ。蓋執刀乃法を人々好む所  
也。一様ニそ定むるに。聞ハ花岡氏の社  
流少く。剪刀を専ら用ひると。剪刀を及鏡

らば、交及の機小ナリ。此ハ皮肉乃切生る者  
なり。我社流少く用ひる者  
了りしを云ふ。

瘻管要害の地を潜りて、遠く所まで至る者あり。  
是を割らむ。其要害乃地を避かむ。其要害  
ありし時、瘻口より其要害の所まで割開  
て、別ハ對口を穿けり。對口を開くの方を、球付  
ハ探針を挿して、先ハ突當る所まで、微く強  
く押せり。其所の皮肉凸く外表ハ突出  
たり。其凸くなりたる所を、指







外科精義 卷六

外科精義 卷六

疔燒爛方の効を統論する。小良効をハク。小  
者あり。瘻路既小假膜を造り膿汁を濾出す者ハ此  
論の如く腐藥の効を奏す。ハク。其あり。ハク。  
なり。ハク。邦俗の膿瘡を病める者。瘻瘡を  
見。針刺の口比小ハク。其口ニ燃紙を  
挿し膿の流利を支へ。月以重ぬハク。毎愈ハク。  
是ハ遂ハ愈ハク。瘻瘡不變。ハク。  
ハク。瘻瘡の淺所。其深所ハク。通ハク。  
温慰ハク。自ら治す。其深所ハク。通ハク。

て。血を混へる膿を漏す。消酸銀水を射  
注。口には塞。ハク。疔定帯。ハク。治す  
ハク。余ハ數々實驗。ハク。所ナリ。  
瘻路小。外表面に布墊を置。條布ハク。疔  
迫。膿の鬱積を防。瘻管を愈合ハク。ハク。  
方々。昔専ら行ハク。術ハク。今ハ猶其弊風  
ハク。遺。ハク。施す者ハハク。是瘻  
管。分泌の機出來。膿を濾出す。云事。知  
ハク。誤。出。縦ハ數百斤。重。七  
疔。ハク。分泌の機を折。其所を愈す

外科精義 卷六

二十九 瘻瘡精義



外科醫法

乃理あるへりやも却てあらしめ膿汁増鬱積して病状彌險惡し陥つて云事也。

海綿瘡

海綿瘡とは潰瘡の肉芽起上りて高き如き恰そ海綿の如き外皮の外に翻出たる形にして然る名はけたるなり肉芽飲るるの力外けせ瘡面の縮るる機をなく其色紫赤或は浅藍にして微しと觸ると血の出やると知覺或は鋭き者あり或は鈍し者あり其組織を或は軟く或は羨の如し者あり或は硬くして菌の如き者あり

よく綴るる肉芽起上る源を尋ねるに一は病所を不潔に保ち刺戟の膏藥を貼し腐骨片又ハ腐膿の塊より異物とれ其所を犯すに或は一は全身の変累より生じ中よ就て飽食よ多し者あり又潰瘡の癖ある人々兩三日連続して飲食を食ふ時々海綿瘡を生ずる事あり惡液質黴毒癌毒壞血病小犯する人々殊に海綿瘡小似たる瘡を發しやはその性を孕りてハ所謂翻花瘡の類なる者あり爰小論する海綿瘡とて性の素より異なる者なり各其條下に

外科醫法

瘡癰精論



外科醫法 卷六

外科醫法 卷六

於云へし、  
 體內、殊に海綿瘡を發し、やすし性ありし所あり、  
 例として、骨聾丸硬腦膜乃如きれど、  
 肉牙の縦り、小起上る間を、瘡の収るへき者小  
 らららけり、外を、其圍をの潰らて、廣くし、  
 幸といふへし、  
 治方を病源を探り、是を制する小ら、異物あり  
 して、是を去り、刺戟膏を貼したる小、是を止免、  
 不潔を保り、是を掃め、就中刺戟膏  
 此罪甚し、小者あり、近頃刺戟膏を禁して用てり

病院にありけり、此院小入たる瘡者を、絶て海綿瘡  
 を生じし者なし、食料を減し、安逸し、身は巻ひ、病  
 所を正直に置き、下劑を與へ、然て軟膏、單油或は  
 加密列浸汁を貼する、ゆゑ、治る者少なり、  
 らん、これと此方の驗顯は、時あり、左小瘡を  
 治方を行かへし、但初を効力輕くして、肉牙は  
 歛むるの方を、次第之効力猛くして、肉牙は顔  
 色の方に移るへし、  
 乾撒糸を縦り、育らぬ肉牙は制するの妙  
 効あり、故に是より瘡の全面を覆ふへし、若瘡の

外科醫法 卷六

三十一 濟艱精錄 藏



知覺鋭工者少也。其中心より貼る是を貼して、其外  
 ハ蠟膏或攤たる布片より覆めんし。  
 肉牙上ニ白糖を撒うるも甚効あり。明礬を其  
 効又一層より消酸銀を一面に搽り、又毒蛇の目  
 ニ搽り、又ハ尤も高き所に搽り、彌効あり。硫酸  
 銅を同効とす。消酸銀を是に搽り、水に解  
 して用ひ、肉牙に歛むる効著る。燒痂を  
 結ひ、故ハ尤も勝る。用方を布片を  
 瘡比大より剪り、消酸銀水を濕し、瘡所に貼し  
 て其上を蠟布より覆めん。又蠟膏を布片に攤

して覆し、其藥汁の乾るは防之為なり。  
 此方を衆方より秀る瘡痕を促すは効あり。洗  
 巾は黒色に變らむるの憂あり、効は微し  
 を異る。又洗巾を黒くするは鹽酸  
 亞鉛の溶水を用ひ、その水に、  
 海綿瘡の翻花状をせざる者には、赤降瀆を撒か  
 け、カラへの外瀆瀆、カンモイニ乃皓礬泥、消酸  
 硫酸烙鐵等を撰用し、又紫絶方、剪除方、七症  
 によして行はる。

浮腫瘡



浮腫瘡は潰瘡の圍に浮腫状をなす。二種あり。一々曾て潰瘡の生るる圍に浮腫の添来をもる者なり。一々浮腫せし所に潰瘡の生る者なり。凡浮腫したる所を羅斯性の焮衝に罹りしむるを治療す。初より速く壊死を轉し。外皮と皮裏の蜂窩織を傷ふと頗る多し。潰瘡に變じて立所を壊死するなり。治方を浮腫の病源を治すべし。且浮腫の所を高に置て。瀝たる水を利えし。瘡面も油も濕るる布片を貼し。或は乾撒糸を貼して。滲出する惡液を吸しむる。

外科醫法

外科醫法

その上は香竈藥囊を覆ふる。又龍腦琥珀して薰せし墊巾を覆ふる。死肉既小落たるを病所の高に置おし。所を水で條布にてよむる。

潰瘡は生たる所へ浮腫の添来たる者も。全身に衰弱小なり。起す。又血は心臓へ歸る道に妨ある小なり。生れ。此れ潰瘡に合せし浮腫は免る。大静脈の押はる時。焮衝のせし静脈の塞りし時。焮衝の續發症とせし。静脈の阻塞狹隘せし。亦血行の歸流を支ふる者あり。精し。

外科醫法 卷六

三十三 濟衆精舎藏



之是成辨之へ。治方を病源に應ずる方之主と  
 分す。美食せしめ強壯薬成與へて全身を補ふへ  
 し。一所に原は来つる者。譬を交較に膿は積た  
 る時少く其交較に下部を總て浮腫しやむ  
 べし。此瘡を發するに如し。是の時少く症状の其  
 膿を漏らむとを禁せざる者少は膿乃深とて潛  
 る者なりとを探るに針刺るべし。静脈焮衝  
 する原つる者も其焮衝と續發症と成制るべし。

静脈腫瘡

了り。静脈に焮衝を及り。又静脈成塞之時  
 こそ。亦静脈努張を致すべし。静脈に焮衝を及り。又静脈成塞之時  
 静脈努張小原に發する潰瘡を。只下支小枝に  
 發する者少く。其正徴を四圍に静脈努張して。累  
 々と顯出。水之安臥を消せしむ。立ちし忽ち  
 著るるを。身立して。永之事を執り。又心  
 成勞を。只静脈努張するに。血水蜂  
 窩織小逼る。其内に入下支總て硬く。太  
 太。熱の加りし者。乃ち安放を。浮腫性  
 二變りて。指して押せし。暫く凹むなり。









外科醫法

決して愈ゆる者こそありけるなり。下支の潰瘡  
治方正誤りの。又その不潔を保ち木下を刺戟膏で  
貼して安放せしむる時こそ殊に此瘡小轉しや  
し。蓋し安放せしむる時こそ焮衝敷く出来て其度  
毎小滲出する者の硬く水遂みそ臍胝状小を水  
にあり。又異物ある時こそ臍胝物を作出して去せ  
る。包藏せしむるとするそ良能の妙策と云へば  
骨瘡を合せしむる肉瘡の甚しき硬くする時小  
其内小放し腐骨片は包する事あり。又痛  
風のと云悪液質の人を殊小臍胝瘡に患いや

この性を具するなり。治方と病源を拂い。又臍胝の硬くする所を  
除くにあま多そ瘡所は應する小慎みて臍胝物  
を拂ふて是なり。其方を軟膏を貼し。温水を  
敷い。又そ加密列浸汁小て敷い。又そ亞麻仁糊を  
貼し。病足を正直に安放し。口小適へる飲食は與  
へ。輕き泄薬を行ひ。惡液質乃人を小そ。其毒を解  
するの内薬を斟酌して行ふなり。

是等の方効を下時ふそ。瘡底の中心より四方小  
向い菊座の如く一切入る。臍胝物の裏なる肉

外科醫法 卷六 三十六 齊足清膏



二、通し糊劑を貼し膿を醸さしめ、是に乗  
 して硬くし、物を融かす、化膿生ずる小  
 至る、實際斯膏を塗らる撒糸を貼し、其化膿  
 成養ひ、胼胝物に全之融けり小至り、瘡を歛め  
 心の方へ移るべし、  
 胼胝物を速く去るの効確實なる者を、壓定帶と  
 勝てる者なし、バイントン欲け硬膏鱗次帶應寸、  
 乃ち雌羽杖、瘡の下一寸許の所より、巻を多し、  
 瘡乃上一寸許に所より巻終るを、此方壓定の  
 力強之、病者産業を廢るる小及んば、瘡の甚た大

ろくろ汁の出る微なる者には、三四日毎に  
 一度換へ、病所を安放し、此方を行ふ時  
 こそ、焮衝と系起る胼胝瘡を効をなす事なり、他  
 性と合せしる者の、此方より効なきを、腐薬を  
 貼し、顔し、又々刀ありて切去るべし、赤降瀆を瘡  
 内小撒つけ、瘡縁を剥駕亞私を塗り、又々外瀆  
 泥、皓礬泥あり覆ひ、痂を結へを蒸漏し、是を落  
 すと、要害の地小ららるる瘡のみ、刀を用ゐる  
 落さる、包皮陰脣の如きを、胼胝瘡の猛治方を  
 行へ、一旦を治せし、如之を、速に反復



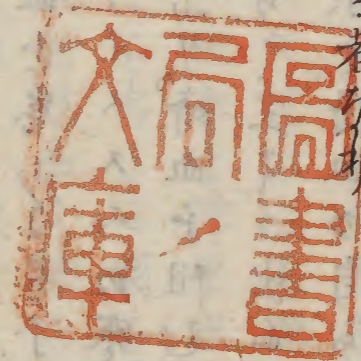




外科醫法 卷六

外科醫法 卷六

正之者少以少之者多  
治方々、飲食を慎み、薬を用ひて滯り、之を經血持  
血を調り、之を主とす、瘡所少々緩和方以應  
之者



外科醫法卷六終

存誠林先生藏板

泰西醫方二十四脈表

一枚摺

侍醫法眼信長井先生譯

侃斯達篤氏內科書

全一百八卷

侍醫法眼信長井先生譯

新藥百品考

初編二冊  
二編二冊

全四冊

大博士佐藤舜海先生譯

斯篤魯默兒砲痰論

全二冊

大博士佐藤舜海先生譯

外科醫法

內編十五冊  
外編廿二冊

全三十七冊



越中佐渡三良先生著

和蘭藥性歌

全二冊

東京坪井芳洲先生譯

醫療新書

全三十冊

倉次元意先生譯

眼科摘要

全部九冊

近刻

時醫法眼松本先生藏板

解剖羅旬語加類多

骨部

西洋風画入

山内氏藏板

漢字和譯附

英語可留多

洞海林健卿譯補

穴篤兒藥性論

全部十八冊

侍醫西之學教頭山崎松本良順誌

隱士樂齊山内豐城按閱補註

養生法全三冊

玄端

杉田先生譯

全部六冊

健全學

作樂元知齋先生詳編

西洋英傑傳

全六冊

河津孫四郎先生校正

大學東校恒太郎石黒先生譯

廣藥鑒法

全一冊



大學東校衛平東田先生譯補  
袖珍藥說 全三冊

大學東校恒太郎石黒先生譯  
藥品溶解表 一枚摺

大學東校石黒先生譯述  
官版 化學訓蒙 全十冊

大坂醫學校抱獨英氏  
官版 日講記聞 冊數不定

大學東校  
官版 日講記聞 冊數不定

大學東校田代先生譯述  
切斷要法 全一冊

百太郎佐藤先生譯  
大平海新報 冊數不定

基五十川先生譯  
林戰要錄 全三冊

菱湖巷先生書  
三體千字文 四帖

箕作少博士譯  
英語手引草



滿斯歇兒氏口授  
官板  
病理畧論

全二冊

大學東校學會開鑄  
中助教久我克明先生述  
官版  
痘龜鑑

全一冊

石黑忠惠先生譯述  
虎烈刺論

全一冊

銅鑄  
萬國地圖



大學東校  
官版御用所

西洋醫書

東京馬喰町二丁目

發兌書林 英蘭堂 鳴村屋利助



